

S U I N O M A H O U

スイの魔法

2 銀の人形
GIN NO NINGYOU

白神怜司
Shirakami Reiji



Main Characters
主な登場人物



???
謎の銀髪の美少女。
スイとも深い関係がある
というが正体は不明。



タータニア・ヘイルン
エヴンシア王国出身の騎士。
自国を滅ぼしたブレインル帝国
に深い恨みを抱く。



ウェイン・クレイサス
紫の髪、紫の瞳の少年。
「騎士科」に所属している
ことを鼻にかけている。



シルヴィ・フェルトリート
侯爵家令嬢。
小柄で可愛らしく気品もあるが、
けっこう猫かぶり。



ユーリ
滅びし山間の部族の姫であり、
高い魔力を誇る。
アレルタに忠誠を誓っている。



アレルタ・ブレインル・メトワ
リブテア大陸全土を支配する
ブレインル帝国の三代目帝王。
「狂王」として畏れられている。



スイ
主人公。銀髪蒼眼の孤児。
十歳。容姿・知性・魔力を
備えた天才だが、
超マイペース。



ファラ
伝説の金龍にして、
スイの忠実なく使い魔。
魔法訓練の良き相手。

プロローグ

人の気配のない、真つ暗な空間に光が生まれた。

壁に刻まれた『魔導言語』が淡く青白い光を宿すと、時を止めて久しいその場所に、無数の小さな明かりが灯っていく。

浮かび上がったのは、円柱状の建物の内部だった。

黒を基調にした壁や床は、すべてが岩のように硬い材質で加工されており、現代においては存在しない技術が施されている。

入り口の壁面から、建物の内部にまで描かれた『魔導言語』の全てが青白く光ると、その部屋の最奥部に据えられた巨大な氷塊の姿が照らし出された。

高さにしておよそ五メートル。その中には、一人の少女の姿があった。

透き通るような銀色の髪。顔を閉じて眠っている少女は、美しい意匠の凝らされた黒いゴシック調のミニドレスに身を包んでいる。

——突然、少女の表情が歪んだ。

少女の脳裏に次々と甦ってくる、さまざまな光景の断片。

「——これで『ヘリン』の終焉——成された——。——『銀の人形』——」

ぐるぐると回る意識。男の声が脳裏に重なる。

「……『ヘリン』の時代……魔導戦争……世界の混沌……」

押し寄せる記憶の波が、喉元を絞めあげるような不快な感覚を伴って、少女の意識を翻弄し、混濁させ、かき混ぜていく。

だが、それは唐突に止んだ。

氷塊の中で、少女はゆっくりと意識を覚醒させる。

眼を開け、歪んだ視界の先に氷の壁が映り込む。と同時に、記憶の濁流が静まった意識の先で、少女は、繋がりのような何かを感じ取った。

自分と繋がった何者かの存在。

そのことに気づいた少女は、氷塊の中で口角を吊り上げた。

先程までの苦悶に満ちた表情は消え去っており、不気味とも呼べる笑みが形作られている。

——そして少女は、呼び掛ける。

大事に、大事に。

強く引つ張り過ぎたら途切れてしまう。

か細い糸を自分のもとへ手繰り寄せるように。

少女は繋がりに向かって、呼び掛け続けた——

1 光夜の恋

——それは、空气中に溶け込んだ魔素が、特殊な科学反応を見せる光夜と呼ばれる夜。空に浮かんだ光の帯が、穏やかな風に揺らされたカーテンのように煌めく夜のお話だ。

その街は、周囲を取り巻く巻く円形の壁の内側に、さらに高い城壁を築いていた。高さ二メートル半ほどもあるのかという白塗りの壁である。

何故そんなものが街の中にあるのか。理由は至って単純なものだ。

平民や貧民が住む区画と、貴族が暮らす区画とを隔てているのである。

その壁際の狭く薄暗い路地で、鈍い音が鳴り響いた。

「が……はッ」

「クソツタレ！ 食い逃げなんて手癖の悪いガキだ！ ナメた真似しやがって」
腹を蹴られ、壁に叩きつけられた青年に、男が声を荒らげる。

「……へっ、あんなクソマズいパン一つでガタガタ言うんじゃねえよ……」

「フザけたことぬかしてんじゃねえぞ、スラムのゴミが！」

額に青筋を立てた男が、ずるずると尻餅をつきながら言い返す青年の腹を再び蹴りつける。

すると、青年の身体がおじぎをするように曲がり、その頭が男の前に突き出された恰好になる。

男はその頬を力任せに殴りつけ、汚いものを見るような目で青年を見下ろした。

「せっかくの光夜だ、これぐらいにしといてやる……！ だが次はねえからな！」

怒気をあらわにした男は、吐き捨て、踵を返してその場を後にした。

倒れ込んでいた青年は、壁に背を預けたまま軋んだ身体をゆっくりと起こし、口の中の血を吐き

出すと、忌々しげに空を見上げた。

「……へっ、何を浮かれてやがるんだか……。何が『せっかくの光夜』だっつてんだ……」

口元の血を拭った青年。彼の名はウイル。貧民街に住む身寄りのない青年だ。食う物に困り、露店から商品を盗んだ浮浪児であった。

街が、光夜を神聖視してお祭り騒ぎになると、浮浪児達の懐が潤うわけでも、腹が膨れるわけでもない。生きるために、食うために必死な毎日。厳しさを増すばかりだ。ウイルも何とかその日暮らしを続けているが、今回は運悪く捕まってしまった、というわけである。

自分の置かれた不遇と、街の活気とのあまりに大きい温度差。それを改めて噛み締めていたら、不意に視界が歪んだ。

頬を伝った涙をウイルが乱暴に拭いていると――

「――あの、大丈夫ですか……？」

突如としてウイルの耳に届いた、鈴を転がしたような透明な声。

ウイルは慌てて周囲を見回す。

だが、こんな物騒な路地裏には、あまりに不似合で上品な少女の声である。いよいよもって幻聴すら聞こえてきたのか。

そんなことを考えて首を傾げているウイルに、再びその甲高い声が問い掛けた。

「あの……！ そちら側に誰か……いらっしやるのではありませんか？」

「そちら側って……」

少女の声に、ようやくウイルは背後を振り返る。

真っ白な壁の向こう側から響く声。

つまり、その声の持ち主は相応の身分の御令嬢か、或いは貴族の邸宅に勤める使用人といったところだろうか。

いずれにせよ、ウイルにとってみれば面白くない相手であった。

「……チツ、騒がせて悪かったな」

「良かった。いらしたのですね。酷いことをされたではありませんか？ お怪我は——」

「——関係ねえだろ。こっち側に首突っ込んだってロクなことにはならねえぞ」

大袈裟に悪態をついてみせるウイルは、さっさとこの場を離れてしまったかった。盗みを働き、不覚を取ったウイルにとつて、少女の気遣いは、ばつの悪いものだったからである。けれども、鈍痛に支配された身体は、まだ自由に動きそうにない。

立ち上がろうと試みるが、全身を走る激痛に「痛ッ！」と声を漏らしてしまう。

「よ、良かったら、これをお使いください！」

壁越しに聞こえた声に嘆息するウイル。

(……まだいたのか)

そんなウイルの耳に可愛らしい「えいっ！」という声が届いた。

その声につられて、つい上を見たウイルの視界に、一枚の真っ白いものが映り込んだ。壁を越えて、少女が投げたハンカチだった。それが、ウイルのもとへふわふわと漂ってくる。

思わず手を伸ばすウイル。

が、自分とは住む世界の異なる人間との関わりを絶つように、伸ばしかけた手を引つ込める。それでも地面に落ちて汚れてしまうのは見過ごせず、ウイルはためらいながらも、そのハンカチを片手で乱暴に受け取った。

シルクで出来た上質なハンカチだった。貴族の使用人が持つ物にしては高級に見える。ならば声の主は、貴族の令嬢だろうか。

親切な気遣いを受けて邪険にするほど、ウイルという青年は落ちぶれていない。だが、この時の状況は普段とは違っていた。

少女の気遣いが、貧民を憐れむ貴族の余裕めいた酔狂のように見えてしまい、ウイルのささくれ立った心を逆撫でしたのだ。

「あの、届きましたか——？」

「——いちいち構うんじやねえよ！ 貴族様の道楽に付き合うのはまっぴらだ！」

怒声を上げながらも、ウイルの視界は歪んでいた。瞬きの拍子に落ちた涙——

少女の優しさは、その純粹さは、今のウイルにはあまりにも眩しすぎた。自分に対する不甲斐なさか、それとも温かな優しさに触れたせいかは分からない。瞳から溢れる

涙を、ウィルは再び乱暴に服の袖で拭い取る。

僅かに生まれた静寂。

ウィルは何とか立ち上がり、その場を去ろうとしてハッと目を見開く。少女の啜り泣く声が聞こえてきたのだ。

「……泣いて、るのか？」

「……泣いてません……」

鼻の詰まったような少女の声は、その答えが嘘であると言語っていた。

それに気づいた瞬間、殴られた痛みとはまた違った種類のそれが、胸の奥をチクリと突き刺した。すると、怒りはあっさり熱を失い、ウィルはただただ自分の情けなさに苛まれるのであった。

「……リリアから聞いています。貴族は民から嫌われているのだと。きっとアナタもその一人なのでしょう？」

震える声で少女に尋ねられると、ウィルはコクリと頷く。

リリアとやらは、おそらく少女の友達か使用人、そんな立場の相手だろう。

ウィルは静かに口を開いて言った。

「ああ、確かに貴族は嫌いだ——」

「……ッ」

「——だけど、俺はこのハンカチを渡してくれた女の子が、貴族かどうかなんて知ったこっちゃね

えんだ。だから別に、アンタのことが嫌いってわけじゃねえ」

「わ、私はルルって言います。お名前を伺っても……？」

「ああ、ウィルだ。ルルか、ハンカチありがとうな」

「……ッ、はいっ」

ウィルには少女の顔など分からなかったが、その嬉しそうな声から少女の表情に満面の笑みが浮かんでいるような気がした。

一年の終わりの光夜。

壁越しに出会ったスラムの青年ウィルと貴族の少女ルル。二人は、これから自分達に訪れる悲しい運命に、その時はまだ気づいていなかった。



「——これを、僕らがやるんですか？」

銀色の髪に、金と青の双眸を携え、造り物さながらの整った顔立ちをした少年——スイが、分厚い台本を円卓の上に置いて尋ねた。

緑豊かな大国、ヴェルディア大陸。ここはその王都ヴェルの北西部に位置する、ヴェルディア魔

法学園の生徒会室である。

生徒会室と言っても、ただの教室ではない。入り口の扉から入ると、抜けるような青空と一面緑の芝生が広がっている。学園の外観からはおよそ想像出来ない広さの空間だ。ところどころに木々がそびえ、いくつかの小屋も見えた。空中にはどこまでも続く長い一本道の廊下が浮遊しており、落下防止用の柵でアーチ状に覆われている。その一本道から五十メートルほど離れた位置にある丘の頂からは、水が滝のように流れていた。すべては【空間変異魔法】によって造り出された、極めて特殊な風景である。

空間の中央あたりに、直径にして十メートルほどの半球状のガラスで覆われた広い一室がある。その中の真っ白な円卓には今、生徒会のメンバーがずらりと並んで腰をかけていた。

「ええ、今度の『光夜祭』でやろうと思っっているわ」

青く長い髪に紫色の瞳。穏やかで優しい霧囲気の少女が答える。

シヴェイロ伯爵令嬢、生徒会会長のソフィア・シヴェイロだ。

ヴェルディアでは毎年、光夜と呼ばれる現象が起こる。気候と空気中の魔素との関係から、この時期になると空に漂う魔素が可視化され、その光がオーロラとなって、ヴェルの上空を彩るのである。

その現象が起こる十二月の二十日から、およそ十日間を光夜と呼んでいるのだ。

この期間に、年の終わりを祝うお祭り——『光夜祭』が行われる。

毎年、ヴェルディア魔法学園を舞台に催される大規模な祭りであり、ヴェルディア王国の伝統行事でもある。

「はい、『光夜祭』まで一ヶ月を切り、生徒会はその準備に追われていた。

『光夜祭』で演し物をするヴェルディア魔法学園の生徒は、六年生以上。

つまり、四年生のスイはそれには当てはまらない。

ところが、『光夜祭』に向けての会議が一段落したとき、ソフィアが、思いも寄らぬ提案をしたのである。

「ナタリアさん、お願い」

「はい」

ソフィアに促され、ウェーブがかかった茶髪と茶眼に眼鏡をかけた小柄な少女——ナタリアが、机の上に分厚い紙の束を置いた。一番上には大きな文字で『光夜の恋』と書かれている。

「私達生徒会は、生徒会の演し物として、この舞台を演じるのです」

満面の笑みでソフィアが告げた。

「ちよ、ちよっと待ってください！ 演し物って、私達にそんな練習をしている暇は——！」

反論を試みたのは、ナタリアと同じく茶髪茶眼の少女。

長い髪を頭の左右で縛った、いわゆるツインテール。スイと同年のフェルトリート侯爵令嬢シルヴィ・フェルトリートだ。

「——大丈夫よ、シルヴィさん。各科の会場の貸出スペースや時間の調整は終わったのだし。それにすでに講堂を使う許可も得てしまっているもの」

だが、ソフィアは笑顔のまま、すでに段取りが整っているのだと堂々と答えた。ナタリアが生徒達の前に、次々と刷り上がったばかりの台本を配り始める。

「……え？」

「台本も、このとおりナタリアさんに作ってもらったから、あとは練習するだけよ」

「ご丁寧にも『光夜の恋——台本』と書かれた表紙の下部には、すでに配役まで書かれている。あまりの手際よさに、スイとシルヴィはただ呆然とするほかなかった。

——そんな経緯があり、手渡された紙の束に目を通して、というわけだ。

「……分厚い、ですね……」

隣のシルヴィと比べ、明らかに厚さの違う台本を手にとってスイが目丸くする。

「フツ、何を言っているんだ、スイ。僕の方が分厚いじゃないか。やはり僕は『騎士科』の生徒だからね！ 主役を演ずるのは当然だろう」

前髪を掻き上げながら得意気に声を張り上げたのは、スイの二つ年上の六年生、『騎士科』のウエイン・クレイサスだ。

「ウエインさんとスイ君の台本は一緒ですよ」

傲慢げなウエインの言葉に、ナタリアが水を差す。

「何だと！」

冷たくあしらわれたウエインは声を荒らげ、乱暴にスイの手から台本を奪うと、自分のそれと並べて見比べた。

ナタリアの言う通り、どうやら名前が違うだけのようである。

「そうみたいね。配役表……あれ？」

二人の台本を後ろから覗き込んでいた生徒会副会長のクレディア・ナイザスが、ポニーテイルの茶色い髪を揺らして首を傾げる。配役表には、スイとウエインの名が二ヶ所に記されていた。

「主要な登場人物が少ないので、ここは是非、スイ君とウエイン君に二役をこなしてもらおうと思ってるの」

「二役ですか？」

「ええ。一日二回の上演予定だから、入れ替わってもらおうと言った方が分かりやすいわね。飽きられないためにもその方が良いでしょうね。メトレリア先生からも承認を得ているわ」

「す、すでにそこまで決定していたんですね……。まあ憶えるのは得意ですから出来なくはないですけど……」

ソフィアの淀みない答えに、不承不承といった調子で台本を捲りつつ、再び表紙の配役表へ目を

戻したスイの動きがピタリと止まる。

「……あの。男性役のウィルは分かるんですけど、もう片方が……」

「貴族の少女、ルルです」

ナタリアの言葉にスイがぎこちなく顔を上げる。

「……はい？」

確かに配役表にもそう書かれていた。

「ルルです」

ナタリアのかけていた眼鏡が、キラッと妖しい光を放つ。

「……あの、ソフィアさん」

「どうしたの？ スイ君」

「それともう決定して——」

「——ええ。決定です」

ばつさりとスイの言葉を遮るソフィア。

「……………そう、ですか」

もはや有無を言わせるつもりはないようだ。

その強い口調に、言い知れぬ気配を感じたスイは口を噤む。

無駄な抵抗は諦めて、その分厚い台本をパラパラと捲り、内容に目を通す。

この『光夜の恋』という舞台作品は、ヴェルデア大陸内を巡回公演している演劇集団の定番演目だという。光夜に出会った、貧民街に住む青年ウィルと貴族の少女ルルによる悲恋物とあって、若い女性に最も人気が高い。

「自分の差を越えた恋愛をテーマにした、実にドラマチックな展開。多くの女性を虜にした傑作よ」
ソフィアは滔々と語る。

「生徒会で演じるにあたって、舞台装置なんかは『研究科』の生徒の手を借りる予定です。すでにそちらはクレディアさんに交渉してもらっています」

「ええ。『研究科』からは色好い返事をいただいています」

「ま、待つてください！ 何で僕がルルの役まで！ 僕は誇り高い『騎士——』」

「——ウエイン君、頑張つてね」

密かに思いを寄せるソフィアに上目使いでじつと見つめられるウエイン。

「任せてください、ソフィアさん！」

コロリと態度を一変させてしまった。

「……僕、女の子の役もやるのかあ」

ウエインの抗議に便乗しようかと考えていたスイだったが、その機を一瞬で失った形だ。

「似合ってるから良いんじゃない？」

まさしく他人事といった様子のシルヴィ。スイはジトツとした目つきで彼女を見やる。

「……似合ってるって、嬉しくないんだけど……。僕の意味はどうなるのさ」
「多分通らないでしょうね。だって、スイが女の子役やるの、私も見てみたいし」
「……ええー……」
弱気なスイの自己主張は、シルヴィによってあっさりと潰つぶされてしまうのであった。
と、その時である。

《 》

「え？」

不意に、見知らぬ声がスイの脳裏に響いた。

「……？ どうしたの？」

驚きと戸惑いの表情を浮かべるスイに、シルヴィが尋ねる。

「あ、ああ、うん。何でもない」

シルヴィの反応に気づいたスイが誤魔化ごまかすように答えた。

彼女には、あのことについて、何も説明していないのだ。

(また、声がした……)

——時はすでに十一月。

エヴンシア王国の密偵としてヴェルディア魔法学園に潜んでいたタータニアの手引きによりスイが誘拐された事件から、早くも三ヶ月が過ぎていた。

タータニアは、ブレインル帝国の脅威から故郷エヴンシア王国を救うために優秀な魔法使いであるスイに目をつけ、協力者に応援を頼んだ。協力者は、エヴンシア王国のゴルディーア伯爵家の者だったが、その男は、手柄を独り占めするためにタータニアを処分しようとした。それに気づいたタータニアは、スイを連れて海へ身を投げ、そうして漂着したのが『放棄された島』だったのである。

島には、かつて世界を混沌に陥れた『魔導兵器』の眠る不思議な施設があった。そこで二人は予期せぬ『守護者』との戦闘に巻き込まれることになる。

見事守護者を打ち破った刹那、【転移装置】が発動し、タータニアの故郷がある北の大陸に飛ばされてしまうが、幸いにもそこは、帰るべきヴェルディア大陸に程近い場所であった。

その後、偶然にも賢狼シルトアの末裔である獣人の種族の少女——ノーラを人攫いから助けることになったスイとタータニア。彼女の案内によって、旅人を惑わすという『妖精の森』を抜けることができた二人は、それぞれの国へ帰るため、そこで別れることになった。

——北の大陸を脱しヴェルへと無事に帰って来たスイだったが、待っていたのは休む間もない事情聴取の毎日。

教会では神父であり父とも呼べるエイトスや、シスターのヘリア、シエスカ、イルシアの三人と

他の孤児達から、王城では国王バレン・ナイザスト、シルヴィの父であるフェルトリート侯爵から誘拐された経緯について細かく説明を求められた。最後には生徒会と学園長のカンデイスら講師陣も加わり、まさしく説明の連続であった。

彼らを納得させるのに特に骨が折れたのが、騒動の主犯格の少女、赤髪のタータニア・ヘイルンについてだ。

スイを攫うために、シルヴィを人質にした彼女の罪は、到底看過されるものではなく、スイが戻ってきた時には重罪人として指名手配されていた。それでもスイは、タータニアによって救われた事情を訴え、その後、結果的に和解をしたという報告の成果もあり、彼女への罪の追及については、どうにか目をつぶってもらえそうだったのである。

しかしそれはあくまでも庇い続けるスイに免じてのことだ。シルヴィ自身は、まだ許せないように、およそ一ヶ月の間、スイに何かにつけてちくちくと小言を漏らしていた。だが、最近ではその様子もようやく見られなくなっていた。

あの慌ただしい帰還から三ヶ月。

カロッセの港町で不意に聞こえた《声》は、今もまだ、断続的にスイの耳へ届いていた――

2 邂逅——アンビー・ニュタル

「……痛……ッ」

生徒会室にある半球状のガラスで覆われた一室の、さらに奥の方――

そこにはこの空間を変異させた魔導具によって造られた草原が広がっている。上空には太陽にも似た眩い光を放つ照明があり、ふわりと風が吹く春の草原のような空間は、そこが屋内であることを忘れさせてしまう。

その場所で、今度の『光夜祭』で演じる二役のセリフを頭に入れていたスイが、突然、顔を擧めて呻き声を上げた。

「スイ……？ もしかして、また頭痛？」

頭を押さえたスイに、シルヴィが声を掛ける。

「あ、ううん。何でもない。大丈夫だよ」

「だったら良いけど……」

心配そうにスイの顔を覗き込んでいたシルヴィが小さく呟いた。

(……何だろう、北の大陸から戻って以来、たまに感じるこの頭痛……。それに、女の子の声みないなもので聞こえる……)

シルヴィにはそう答えたものの、スイは頭痛とあの《声》が関係していると思っていて。だからと言って、それをわざわざ口にして、周りを心配させたり迷惑をかけたたりしたくない。元々が孤児である故か、誰にも無用な負担はかけたくないと気を遣う傾向がある。スイの気丈な振る舞いは、幼いながらも習慣的に身に付いた、年相応ではない悲しい悪癖ともいえた。

芝居の練習をする二人の姿を、スイの《使い魔》ファアラは後方で寝転がりながら見つめていた。体高七メートルほどの身体を、羽を伸ばすようにして横たえている。

赤色の双眸(まぶた)を携えた金龍は、スイの様子の変化に気づくと、カッと金色の眩い光(まばゆ)を放ち、大人の女性——つまりは人型を取って、スイのもとへ駆け寄った。

金色の髪を揺らすファアラは、寒さや暑さを感じないからと、冬にもかかわらずノースリーブのワンピース姿である。しかし、あまりに季節と外れた服装なので、スイが「見ているだけで寒そうだから」と言って、今は白い長袖(ながそで)のワンピースを着ていた。

いつもならば人型になった途端、スイにべったりとくっつくファアラであったが、最近はそのような振りはない。むしろスイをじっと観察し、何かを考え込んでいる。

(……あの妙な場所に行つて以来、主様(あるじさま)の様子がおかしい……)
ファアラが妙な場所と表現したのは、紛れもなく『放棄された島』を指していた。

カロッセを出る頃から、スイの魔力が時折揺らぐようになったことにファアラも気付いている。頭痛を訴えたり、いきなり周囲を振り返ってみたりと、正常ではない何かかスイの中で起こっているのは確かだ。

だがスイに原因を問い質(たた)しても、「何でもない」の一点張りなのである。

(……まさか、とは思うが……)

ふと、ファアラの脳裏にある推測が過(よ)った。まさか、そんなはずはない、と頭を左右に振って否定する。それからスイの隣へ歩み寄り、何事もなかったかのように腰を下ろした。

「それにしても、おかしな話よね」

「どうしたの？」

突如、不満を口にしたシルヴィへ、スイが尋ねる。

「だって、この劇ってどう考えてもこの街——ヴェルが舞台になるはずでしょ？ 光夜の祭りの最中の出会いなんだから。でも、ヴェルにはお話の中に出て来るような白い壁なんてないじゃない？」

「……シルヴィさん、お話にそこまでリアリティを追求しなくても良いんじゃないかな……」
「あら、そうかしら？ 夢ばかり見るより現実を見ずしてこそ恋愛は成り立つってお母様も言っていたわよ」

それは確かにそうかもしれない。が、その言葉をロマンチストであるシルヴィの父、アーヴェン

が耳にしたら落ち込むだろうな。そう考えると、アーヴェンに同情を禁じ得ないスイであった。

「ま、良いけどね。どうせお話なんだし」

「……シルヴィさん、僕が言うのもなんだけど、その感想って、可愛げがないと思うよ……」

スイの言うことはもつともであるが、シルヴィもスイには言われたくない。歳不相応ふそうちようという点では、似た者同士の二人であった。

「スイに言われたくないわよ。せっかくスイが興味を持つような話 お父様から聞いてきたのになあ」

「僕が興味を持つような話？」

「失礼なこと言うんだもん、教えてあげない」

イタズラを思いついた少女らしいシルヴィの口調にスイはべこりと頭を下げる。

「ごめんなさい。気になるから教えてください」

「……なんかあつさりし過ぎててそれもどうかと思うけど……、まあ良いわ。北の大陸について、お父様から情報が入ったの。それを伝えようと思つてたのよ」

「北の大陸の情報？ 何か変化があつたの？」

シルヴィは僅かわずに言い難にくそうにしたが、そのまま続ける。

「ええ。このヴェルディア大陸からかなり西方に位置するブレインル帝国てって知ってる？」

「ブレインル帝国てって言つたら、確かリブテア大陸を統一した国だよな？」

シルヴィが頷いた。

ブレインル帝国てと言えば、あらゆる意味で有名な国だ。

近隣きんりんの小国や民族を支配し、さまざま文化を取り込み、現在世界で最も名を馳はせている強国である。

峻厳じゆんげんな山々が連なる寒暖の差が激しい土地柄にあり、緑豊かで穏やかな気候のヴェルディアとは対照的な厳しい環境である一方、鉱物資源や石炭といった豊富な化石燃料の産出によつて、蒸気機関などの工業的な分野で成長を遂げた。魔導具まどうぐの禁忌指定きんぎなどの規制が少ない国としても知られている。

何よりも特筆すべきは、『魔導戦争まどうせんとう』以降、国を発展させてきた三代の帝王達の存在だ。

圧倒的な武力を背景に、周辺国を次々と下らせた先々代帝王、バルジオ・ブレインル・メトワ。

その息子、フィプロ・ブレインル・メトワは、卓越した政治力で内政を整え、善王と評判であつた。

そして現帝王こそ、ブレインル帝国の名を世界に轟とどろかせた張本人。

今やその名を知らない者はいないだろう女帝、ア rilルタ・ブレインル・メトワである。

王位継承けいせうからたった二年でリブテア大陸の全てを支配するという前代未聞じゆうもんの剛腕ごうでんを發揮した女帝。名実ともにブレインル帝国を大帝国にしたア rilルタは現在、民衆からこう呼ばれている。

——『狂王』と。

その大帝国の名が出てきた理由について、シルヴィは言う。

「そのブレインルが、北の大陸で起こっていた戦争に介入したそうよ」

「ブレインル帝国が？」

「ええ。僅か数週間足らずで五国全てを併合したらしいわ。なんでも、メネンとフェイザス、カロッセとグストラの四国はあっさりと降伏勧告を受け入れたそうよ」

「……あれ、シルヴィさん。エヴンシアは？」

スイがそこを気にするだろうことは、シルヴィも予測していた。

タータニアと和解したスイが、彼女の故郷であるエヴンシアを心配するのは当然だろう。だからシルヴィはエヴンシア王国のことを口にしたくなかったのだ。

「……降伏勧告を突っぱねたエヴンシアに、進軍したブレインル帝国が攻撃をしたみたい。王都レビジーアは【戦略型大魔法】を放たれて三分の一が壊滅。戦意を失ったエヴンシアはその後、帝国に降伏したわ」

シルヴィの言葉に、スイは息を呑んだ。

【戦略型大魔法】と言えば、数十人で大規模な魔法を形成する広域攻撃の【大魔法】だ。

エヴンシア王国にはタータニアがいる。国のために、家族のために帰ると告げたタータニアもその戦火に巻き込まれてしまっただろう。もしかしたら、【戦略型大魔法】によって、やられてし

まっているかもしれない。

スイの中に言い知れぬ不安が生まれた。

その時だった。

《——憎い》

「——痛……ッ」

再び、あの《声》と共に、スイは頭痛を感じた。

突然、目の前で頭を押さえて蹲るスイに、シルヴィが声を掛ける。が、スイは何も答えず身動きもしない。

「主様……！！」

「……う、ああ……ッ！」

頭を押さえ、低い呻き声を漏らすスイの身体から、みるみる魔力が溢れ出し、突風となって吹き荒れた。

短い悲鳴をあげたシルヴィが、瞑っていた目を薄らと開ける。

「……何、これ……！ スイから……？ スイ、落ち着いてッ！」

その光景に、『魔力暴走』という言葉がシルヴィの脳裏を過った。



感情の爆発などによって、魔力が暴走する現象だ。魔力の多い者に稀まれに起こる現象の一つで、このまま放っておけば取り返しがつかなくなる。

動転する気持ちを抑え、シルヴィが寄り添うが、スイの魔力の暴走は止まらなかった。その光景を見ていたファアラが立ち上がり、スイの肩を掴む。

「主様あまのりさま 落ち着いて！」

急いでスイの顔を自分に向けるが、スイの目からは光が消え、焦点が合っていない。ファアラはスイの頬を叩き、その目を覗き込んだ。

「……ッ！」

ようやくファアラと目を合わせ、意識を取り戻したスイの双眸まぶたが、ファアラの姿を映し出す。

我に返ったスイは、自分の身体から溢れ出た魔力が暴れていることに気づくと、慌ててその魔力を抑え込んだ。

「……ッ、はあ、はあ……」

暴走しかけた魔力をなんとか落ち着かせ、スイはその場に手と膝をついて荒れた息を整える。

汗が頬を伝い、身体は震えている。まるで何者かに感情や意識を侵食しんしょくされ乗っ取られたような、生々しく気味の悪い感覚が残っていた。

「ありがとう、ファアラ……」

「……主様あまのりさま 大丈夫……？」

「……うん……」

「ねえ、スイ。一度ディア先生に診てもらいましょー」
と、その時、シルヴィの言葉を遮る声聞こえてきた。

「——その必要はないッスよ」

スイ達が背を向けていた円卓の一室の方からだ。三人は声の主へと振り返る。

そこには、一人の女子生徒がいた。

丸い眼鏡をかけ、ウェーブのかかった桃色の髪を、肩の辺りまで伸ばしている。

女子の割に身長は高い。首に巻かれた青いネクタイの色からすると、九年生か十年生だろう。

制服の上から羽織った、膝裏まである白衣のポケットに手を突っ込んでいる。

紫色の目を細めたその少女は、どこか飄々とした猫のような雰囲気を漂わせていた。

「アナタは……？」

「あー、ちよつと待って欲しいッス。ああ、怪しいモンじゃないッスよ。『研究科』の十年生、アンビー・ニュタル。今度、おたくらの劇に使う魔導具の開発のために来たッスよ」

アンビーは、シルヴィの質問に答えながら、「あー」と声を漏らす。

姿勢を整えて座り直したスイの身体へ、アンビーはポケットから掌大の黒い魔導具を取り出して近づけた。

腰を屈めて、何かを測定しているようにも見える。が、シルヴィ達には何をしているのか分から

なかった。

スイとシルヴィ、それにフアラは、アンビーが声を発するまで、その様子を見守っていた。

ややあって、アンビーは魔導具を見つめながら「あー」と声を漏らす。

「やつぱり。干渉されてるッスね」

「え？」

「スイ君、だったッスカ。最近おかしな頭痛とか感じたりすることないッスカ？」

アンビーの問い掛けにスイが瞠目した。

「あ……、あります。でもどうして……」

「魔力の暴走に、頭痛。それにもしも《声》が聞こえているんだとしたら、何者かに干渉されている証拠ッスね」

つらつらと得意気な様子で告げ、アンビーは魔導具をポケットにしまつて立ち上がった。

「ちよ、ちよつと待ってください。干渉って言ったら確か、同系統の魔力を持った者同士の、繋がりみたいなモノが必要になるんじゃないんですか？」

「その通りッスよ。って言っても、親子や兄弟なんかは、魔力の性質に差があるのでほぼ不可能ッスね。特殊な繋がり形成するために、身体に【施陣魔法】を施すような真似をしない限りは」

シルヴィの質問に、アンビーが淡々と答える。

たとえば【特殊魔法】を用いるなら不可能ではないが、それ以外では難しいだろう。

しかし唯一の特例であれば話は別だ。スイは、かつて入り浸っていた王立図書館の『論文階層』で目にした書物のことを思い出した。

「……それって、もしかして、僕には双子の兄弟がいるかもしれない、ってことですか？」

確かに彼女の言う通り、遠距離にありながら干渉によって相手の意識と何らかの接触を持つという事例はスイも知っている。その特例こそが、一卵性の双子だ。

「それは分からないツスけど、あまりそっちの線は考えられないツスね」

「どうしてですか？」

「干渉されてるってことはつまり、自分の生活や環境を覗かれるってことツス。それだけならともかく、身体を乗っ取られる可能性もあるツスよ。仮にキミに双子がいたとしても、こういう形で接触してくるのは、あまりに不自然じゃないツスか。このまま放っておくのは得策じゃないと思うツスね」

時折聞こえる《声》も、これが干渉によって齎されたものであるならば説明がつく。

「じゃあもしかしたら、干渉してくる相手と話したり出来るんですか？」

「それはやめた方が良くツスね。確かキミは孤児ツスよね？」

「ど、どうしてそれを？」

「……はあ。キミ、意外と有名ツスよ。その髪の色に、その見た目。正直言って知らない人の方がウチの学園じゃ珍しいツスよ」

呆れた様子で告げるアンビー。

スイはきよとんとした目をシルヴィイに向けた。

シルヴィイも肯定を示して頷く。

自分の知名度がそんなに上がっているなど、スイは考えたこともなかった。が、気づいていないのはおそらくスイ本人ぐらいだろう。

「どっちにしても、相手の素性が分からないまま接触するなんて、お世辞にも賢い方法とは思えないツスよ。まあ干渉者に対して、思い当たる相手がいるなら良いツスけど、分からないならオススメしないツスよ。むしろ対策を練るべきだと思うツスね」

「対策なんてどうすればいいんですか？」

「出来ないことはないツスよ。干渉による繋がりは、同じ魔力を持っている相手との、言わば細かい糸みたいなモンススからね。魔力の繋がりを遮断さえすれば、問題ないツス。幸い、試作した魔導具にそういった干渉を対象にしたものがあるツスよ。試作品だから協力してくれるなら無償であげるツス」

「試作品って、信用出来るんですか……？」

『『研究科』のアンビー・ニュタルって言えば、それなりに有名だと思ってたんツスけど、こりゃ認識を改めた方が良くもされないツスね……』

訝しむシルヴィイに、アンビーが頭をぼりぼりと掻きながら呟いた。